

『Me, My Mouth and I』観劇レポート

岩下拓海 (東京大学文学部 3年)

トゥレット症の俳優ジェス・トムがサミュエルベケットの戯曲「わたしじゃないし (Not I)」の上演に挑戦する約一年間のドキュメンタリー番組だ。

ジェス・トムは、トゥレット・ヒーローという団体にトゥレット症を創造的に昇華するためにパフォーマンス公演を続けてきた。彼女は「わたしじゃないし」のセリフのうち大部分を占める「口」という役をトゥレット症当事者として読み直し、新しい物語をつむぎ直すためにこの上演に臨んだのだという。

まず、「わたしじゃないし」の主なコンセプトをわたしなりに解釈したものを書くが、これは上演によって受けたインスピレーションのスケッチではなく、戯曲の文字情報と関連レクチャーから組み立てたものである。

「わたしじゃないし」には「口」と「聞き手」という二人しか登場しない。「聞き手」は上演中いくつかの仕草をすることだけが決められていて、セリフは一つもない。その代わりに「口」がとてつもないスピードで膨大な量のセリフを速射的に打ち出す。

「口」は自律した機械のように止めどなく「彼女(She)」を回想する。「彼女は一人ぼっちだった」「暗闇に落ちてしまって」「わたしじゃないわ、彼女よ」と……。その回想のディテールの細かさや、出来事の卑小さ、そして「わたしじゃない」と繰り返すことによる逆説的な効果で、次第に「口」はその「彼女」の口なのだろうということが了解されてくる。

「彼女」はおそらく普段は寡黙なのだが、ふとした時にタガが外れてしまったかのように止めどなく言葉をたれ流してしまう、そういった二面性をもった人だったのだろう。タガが外れてしまった時、自分の口がまるで自分のものではなくてしまったみたいに動き続けるさまを機械のように喋り続ける「口」に託している。

以上のことを踏まえて、トゥレット症候群の俳優と「口」という役には直感レベルで強い繋がりを感じる。トゥレット症候群とは自分の意思に反して下品なスラングや場に相応しくない言葉が出てきてしまう障害のことを言うからだ。意思に反して口が動いてしまう、という点で「口」とジェス・トムは似ている。

古典を上演するコンセプトとしてこれ以上のものはないだろう、成功するに違いない、と思った。

実際、(フルサイズで鑑賞することは叶わなかったが、)「biscuit biscuit biscuit biscuit …… Becket!」と暗闇に消えていく最後のシーンを見ただけでも、トゥレット症の症状

を生々しく置き去りにするのではなく、上演のために飼い慣らすことに成功したことがわかる。全編を見れなくて大変悔しい。

この映像を見てもっとも自分が影響を受けた点は、「表現」とは「何かについての表現」なのだということだ。

わたしはサークル活動で演劇をやっている、定期公演を必ず遂行しなければならない環境でやってきた。表現したいことが先にあるのではなく、公演の予定が先にあるに叶うように準備する。

定期公演に備えてたくさん劇を見に行ったり、定期的に稽古会を開いたり、表現方法について研鑽をつむのだが、肝心の表現したいもの（あるいは表現する理由や根拠）を探すことがなかった。「Me My Mouth and I」を見てそのことを強く反省した。

ジェス・トムはトゥレット症の俳優が「口」を演じることに社会的意義を見出し、上演の根拠を求めて戯曲の中に登場する場所へ赴いたり、ベケット研究家のもとを訪れたりしている。その中でも、映像の中盤、娘を亡くした友人の話を聞きに行ったことは彼女は作品のコンセプトに確信を与えただろうと思った。

配信期間が終わった後にこの文章を書いているので正確なセリフを引用できないのだけど、「障害者が新しい物語を紡ぎなおすことに意義がある」という趣旨の言葉には目を開かされた。このエピソードは彼女がこの（大変な）上演を遂行するための強い根拠になったと思う。

おそらく、表現したいことや表現する理由・根拠よりも、表現の場が先行してしまっているという問題は大学サークルに限った問題ではないと思う。多くの小劇場演劇が、認知を獲得するために、あるいは、経済的な理由でマンネリ化した公演を打ち続けている。根拠が曖昧なままでは作品は強度を持たない。そして根拠は天から降ってくるものではなく、自分の手と足で探すものである。何も稽古場で本を読むことだけが稽古ではない。上演の強度を上げるためにやれることは稽古場の外にもあることに気付かされた。

## 講評 長島 確

（東京芸術祭副総合ディレクター／ファーム共同ディレクター／東京藝術大学音楽環境創造科特任教授）

岩下さんのレポートを読み、原作の戯曲のテーマや構造とアーティスト（パフォーマー）の状況とがいかに噛み合っているかをしっかり捉えようとしているところがよいと、まず思いました。さらにもうひとつ、「表現」にまつわる問題についての考察が、なによりも重要だと思いました。サークルに限らず、表現活動をする事自体が目的化し、形骸化してしまうことは、よくあることだと思います（わが身を振り返っても）。そういう空虚さが常態化したなかに、ジェス・トムさんのような、ひとりの人間の存在の重みはずしりと掛かったアクションが出現してくると、本当にはっとさせられます。なぜ表現するのか、それをする自分は何者なのか、ちょっと立ちどまってそういうことを愚直に考えることが意味をもつ時代がまたやってきていると思います。